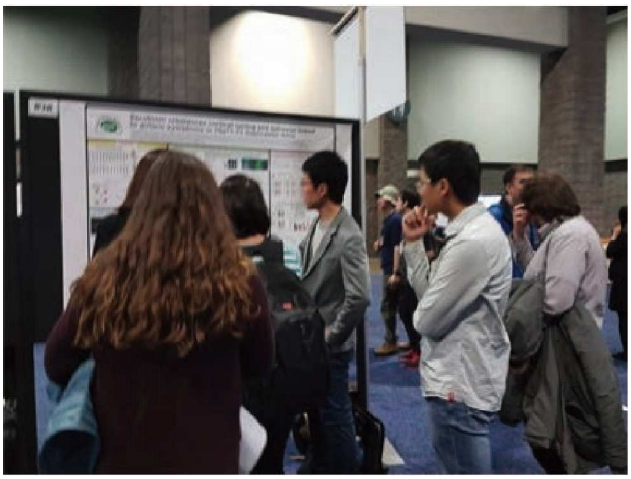
参加記

# SfN2017 参加記

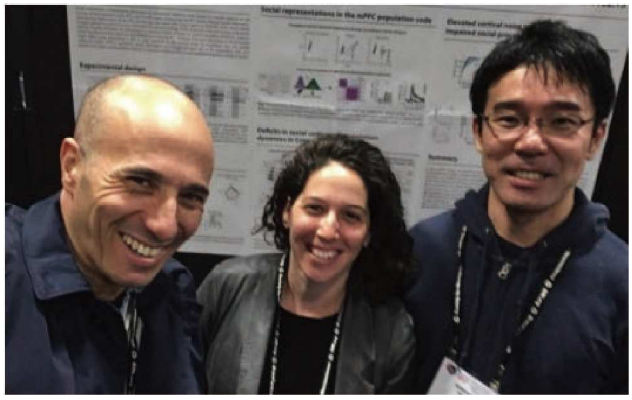
理化学研究所
脳科学総合研究センター
精神生物学研究チーム
中井 信裕

11 月、空はうす曇りの中、ダレス国際空港に降り立ちました。4 年ぶりのアメリカです。期待に胸躍らせながら、ワシントン DC で開かれた北米神経科学学会の Neuroscience 2017（日本では “SfN に参加する” といった表現がよく使われますので、ここではそれに倣います）に参加してきました。ワシントン DC は氷点下になった日もあり、日本に比べてだいぶ寒かったです。しかし日差しが出ると心地よい天気です。木々も紅葉しており、季節を感じることのできる美しい街並でした。SfN の会場はワシントンコンベンションセンターで、ポスター会場は競技場が丸々入るくらいの広い会場でした。やはり毎年約 3 万人もの参加者が集うとてつもない学会ですね。私としては今回が二回目の SfN 参加となりました。規模が大きいのでシンポジウムやポスター発表で見たいものすべてを見るのは時間的に不可能です。ポスターも午前と午後で入れ替わってしまうので、どの発表を見るのかいかに絞り込むかが難業です。

学会初日にトラベルアワード受賞者が参加する International Fellows Orientation Session と International Fellows Poster Session が開かれました。これらのセッションで何をするのだろうと気になっていましたが、イタリア、インド、ブラジル、アルゼンチン、メキシコなど世界各地からの参加者と自己紹介や研究発表を交わし、国際交流を深めようといった内容でした。オリエンテーションのときに特に興味深かったのは、運営委員の研究者の方がアドバイスした内容です。研究者間での新たな人脈を構築するときには「まずはグループの輪に入りなさい、そして、私は価値のある人間である、だからここにいる、だからあなた方は私の存在を認めるべきだ」というくらい自己主張をしないと相手にされないよ、と。それってうっとうしくない?と思ったのですが、でも相手が求めているものと自分が提供できる材料が合致するときにこういった主張性が生きてくるのでしょう。日本人が非常に苦手とするところですね。大変勉強になります。また他国の参加者を見て気づいたのは、日本に比べて、女性の研究者や大学院生の参加が非常に多い点です。男女比では半々かそれ以上か。聞くと女性研究者の総数が多いからだということらしいです。日本にもたくさんの優秀な女性研究者がいますのでどんどん世界で活躍して欲しい。



ポスター発表の様子



ワイツマン研究所の Ofer Yizhar 博士と大学院生の Dana Levy さんとの再会

私のポスター発表は 3 日目午前中のセッションで朝 8 時から 12 時までの発表時間でした。9 時半くらいまではポスター会場は閑散としてましたが、朝の基調講演があったからでしょうか。10 時以降に人が増え、一気に会場の熱気があがりました。私の研究はモデルマウスを用いた自閉症の脳機能解析ですが、みなさん私の拙い英語の発表を真摯に聞いてくれて、ヒトの研究につながる興味深い内容だと言ってくれてありがたかったです。上海の研究者からは共同研究の話も持ち上がり有意義な時間が過ごせたと思います。今回の SfN では私はほとんどの時間をポスター会場で過ごしました。発表している研究者と直に話ができて、質問もしやすいポスター発表がやはり一番理解が深まると思います。ふらふら歩き回って、面白そうな発表を見つけるのも楽しいですね。

1 February 2018 Consecutive Number 213

また、以前お世話になったイスラエルの研究者やアメリカで働いている友人の日本人研究者と久々に再会できてうれしかったです。アメリカのメジャーな学会ではこういった会合があるからいいですね。3 日目の夕方に Yizhar さんに連れて行ってもらったとある懇親会では、人工知能研究で著名な Demis Hassabis さんと直接話すことができて大変光栄でした。このように SfN では普段出会うことの難しい人たちと交流する機会にめぐり合えることが良い点だと思います。さらに研究分野ごとにソーシャルのイベントもあり、海外の研究者と仲良くなれる良い機会があります。ソーシャルでは日本人研究者をあまり見かけませんでしたが、みなさん積極的に参加するといいでしょう。きっとそこで新しい研究に出会えるはずです。ついでに食事のことを記すと、アメリカのハンバーガーとビールはおいしかった！日本よりちょっと値段が高いですが、それ相応の味わいです。ぜひご堪能ください（笑）。

今回 SfN に参加して、自分の研究へのフィードバックや最新の研究成果に触れることができ、貴重な経験をさせて頂きました。世界中の研究者達と話すことで、この先、自分に何が必要なのか、神経科学として何が求められているのか、といった問いに気づかされます。この学会は神経科学の潮流や今の自分自身の立ち位置を知る上でとても価値あるものです。若い世代、特に大学院生のみなさんには SfN に参加する機会が増えてほしい。予算の都合があるとは存じますが、大学院生に対する旅費の補助制度をさらに充実させてもらいたいです。最後になりましたが、このような機会を与えてくださった日本神経科学学会および北米神経科学学会の関係者の皆様、そして研究発表にあたり、内匠先生をはじめ、お世話になった共著者の先生方にこの場をお借りして心より御礼申し上げます。

1 February 2018 Consecutive Number 213